

二〇二一年度 大学入学共通テスト 解説〈現代文〉

第1問 評論 香川雅信 『江戸の妖怪革命』による（設問中に芥川龍之介「齒車」の引用あり）

〔総括〕

第1問の評論は、日本の中世から近代にかけての「妖怪観」の変遷を論じた文章。問1の漢字は従来通りの形式だが選択肢の数は一つ減。問2～問4は、比較的狭い範囲の理解を問う設問で、選択肢も短く、解きやすい問題と言える。問5は新傾向。生徒の「学習の過程」に即して本文の理解を深めていく設問。全体として試行調査ほどの「変化」は見られず、従来のセンター試験の延長戦上にある問題であった。

〔解説〕

問1 漢字問題 基礎

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

漢字はいずれも難しい字ではないが、(イ)「喚起」の「喚」は「換」と混同しやすく、注意が必要。(ウ)「援用」は「自分の主張の助けとするため、他の意見・文献などを引用したり、事例を示したりすること」である。意味を知らないと、想起しづらかったかもしれない。(エ)は選択肢の「威嚇」「地殻」がやや難しいが、「隔てる」と「隔絶」の意味の類似性から③を選べるだろう。語彙力は読解力の基盤である。熟語の意味まで含めた漢字学習を意識してほしい。

問2 内容説明問題 標準

- | | | | | | |
|-----|-----|--------|--------|--------|------|
| (ア) | 民俗 | ① 所属 | ② 海賊 | ◎ ③ 良俗 | ④ 継続 |
| (イ) | 喚起 | ◎ ① 召喚 | ② 返還 | ③ 栄冠 | ④ 交換 |
| (ウ) | 援用 | ① 沿線 | ◎ ② 救援 | ③ 順延 | ④ 円熟 |
| (エ) | 隔てる | ① 威嚇 | ② 拡充 | ◎ ③ 隔絶 | ④ 地殻 |
| (オ) | 投影 | ◎ ① 投合 | ② 倒置 | ③ 系統 | ④ 奮闘 |

- 正解 (ア) 1 3 (イ) 2 1 (ウ) 3 2 (エ) 4 3 (オ) 5 1

傍線部 A 「民間伝承としての妖怪」とは、どのような存在か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

傍線部を含む一文を抜き出す。

A 民間伝承としての妖怪とは、そうした存在だったのである。

直後に「そうした存在だった」とあるので、内容はそれ以前で説明されていると考えられる。また、傍線部 A は、③末に位置し、③の内容をまとめている箇所と考えられるので、同段落から解答根拠を拾えばよい。「妖怪」という言葉に注目してその説明を探すと、「妖怪はそもそも、日常的な理解を超えた不可思議な現象に意味を与えようとする民俗的な心意から生まれたもの」「意味論的な危機に対して、それをなんとか意味の体系のなかに回収するために生み出された文化的装置が『妖怪』だった。」とある。つまり妖怪とは「意味論的な危機（日常的な理解を超えた不可思議な現象に遭遇すること）に対して、なんとか意味の体系のなかに回収する（意味づけをおこなって理解する）ための装置」だったということである。以上の内容を適切に説明している①が正解。

- ②は、「フィクションの領域において」が誤り。傍線部直前に「切実なリアリティをともなっていた」とある。
- ③は、妖怪は「未来への不安を…認識させる存在」ではない。
- ④は、妖怪は「意味の体系のリアリティを…人間に気づかせる存在」ではない。

⑤は、妖怪は「危機を人間の心に生み出す存在」ではない。不可思議な現象に意味づけを行い、不安や恐怖を鎮めるために生み出された存在である。

正解 ⑥ ①

問3 内容説明問題 応用

傍線部B「アルケオロジイ的方法」とは、どのような方法か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「アルケオロジイ」は⑦～⑨で説明されているが、特に⑦冒頭の一文で端的に記述されている。

⑦ アルケオロジイとは、通常「考古学」と訳される言葉であるが、フーコーの言うアルケオロジイは、思考や認識を可能にしている知の枠組み——「エピステーメー」（ギリシヤ語で「知」の意味）の変容として歴史を描き出す試みのことである。

「エピステーメー」もあまり聞き慣れない言葉かもしれないが、本文では、

⑦ 「事物のあいだになんらかの関係性をうち立てるある一つの枠組みを通して、はじめて事物の秩序を認識することができるのである。この枠組みがエピステーメーであり……」

と説明されている。われわれが世界を眺める時、無意識のうちにそれを通して眺めてしまう「知のフィルター」のようなものをイメージすればよいだろう。そうした「知の枠組み」（＝エピステーメー）の変容という視点で歴史を描き出すのが「アルケオロジイ」である。エピステーメーの変容に言及してアルケオロジイの方法を説明している②が正解。

①は、「客観的な秩序を復元」が誤り。⑦に「われわれは決して認識に先立って『客観的に』存在する事物の秩序そのものに触れているわけではない」とある。

③は、「さまざまな文化事象を……要素ごとに分類して整理し直す」が誤り。

④は、「通常区別されているさまざまな文化事象を同じ認識の平面上でとらえる（ことが可能になる）」のは、「アルケオロジ的方法」の「結果」であるし、「エピステマー」への言及がない。

⑤は、「歴史的事象を……大きな世界史の変動として描き出す」のではなく、「知の枠組みの変化」という視点に立つのがアルケオロジである。

正解 7 ②

問4 内容説明問題 応用

傍線部C「妖怪の『表象』化」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

傍線部前後の文脈を確認しよう。

⑬ 人工的な記号、人間の支配下にあることがはっきりと刻印された記号、それが「表象」である。

⑭ 「表象」は、意味を伝えるものであるよりも、むしろその形象性、視覚的側面が重要な役割を果たす「記号」である。妖怪は、伝承や説話といった「言葉」の世界、意味の世界から切り離され、名前や視覚的形象によって弁別される「表象」となっていた。それはまさに、現代で言うところの「キャラクター」であった。そしてキャラクターとなった妖怪は完全にリアリティを喪失し、フィクショナルな存在として人間の娯楽の題材へと化していった。妖怪は「表象」という人工物へと作り変えられたことによって、人間の手で自由自在にコントロールされるものとなったのである。こうした^C妖怪の「表象」化は、……。

傍線部Cの直前に「こうした」とあるので、傍線部の内容はそれ以前で説明されている。「表象」という言葉に注目して読み返すと、右のように何度も繰り返し返されている。「表象」とは、「人工的な記号」「視覚的側面が重要な役割を果たす記号」のことであり、表象としての妖怪とは、フィクショナルな「キャラクター」としての存在と行うことができる。中世において「神霊からの言葉を伝える記号」であった妖怪が、「人工的で、視覚的側面が重視される記号」となり、いわゆる「キャラクター」に変化したのである。こうした内容を適切に説明している②が正解。

問5 空欄補充問題 標準

- ①は、「人間が人間を戒めるための道具」が誤り。
- ③は、「人間世界に実在するかのよう感じられる」が誤り。
- ④は、傍線部「妖怪の『表象』化」は、「人間の力が世界のあらゆる局面や物に及ぶ」ようになったことの帰結であり、「きっかけ」ではない。
- ⑤は、「戯画的に形象」が誤り。

正解 8 ②

この文章を授業で学んだNさんは、内容をよく理解するために【ノート1】～【ノート3】を作成した。本文の内容とNさんの学習の過程を踏まえて、(i)～(iii)の問いに答えよ。

(i) Nさんは、本文のⅠ～Ⅷを【ノート1】のように見出しをつけて整理した。空欄Ⅰ・Ⅱに入る語句の組合せとして最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。

生徒の「学習の過程」に即して空欄補充を行うという新傾向の問題。ただし、従来のセンター試験でも「段落構成を問う問題」は出題されており、問うていることの内実はあまり変わらない。

Ⅰ (2)～(3)について。選択肢①・②・③にはいずれも、「娯楽の対象」という言葉が入っているが、③には「娯楽の対象」としての妖怪の話は全く出てきていないので、②・③をまとめる「見出し」としては不適切。②は、近世中期に「フィクション」としての妖怪が生まれたという話、③は、「そもそも」妖怪とは何であったかという話なので、選択肢④「妖怪に対する認識の歴史性」という説明は正しい。この時点で④だけが解答候補として残る。

Ⅱ (4)～(5)について。④「妖怪に対する認識が根本的に変容」、⑤「妖怪に対する認識がどのように変容」とあるので、④「どのように妖怪認識が変容」という「見出し」は適切。正解は④。

正解 9 ④

(ii) Nさんは、本文で述べられている近世から近代への変化を【ノート2】のようにまとめた。空欄Ⅲ・Ⅳに入る語句として最も適当なものを、後の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

Ⅲ について。【ノート2】に「近世には、人間によって作り出された、Ⅲ が現れた」とあるが、【ノート1】を参照すると、近世の妖怪については、⑫～⑭で説明されているとわかる。問4でも言及した通り、近世の妖怪とは「人工的な記号」「視覚的側面が重要な役割を果たす記号」「フィクショナルな『キャラクター』としての存在」である。したがって、③が正解。

①は、「恐怖を感じさせる」が誤り。

②は、「神霊からの言葉を伝える」というのは、中世の妖怪観。

④は、「人を化かす」が誤り。

Ⅳ について。【ノート2】に「近代へ入るとⅣ が認識されるようになった」とあるが、【ノート1】を参照すると、近代については、⑮で説明されているとわかる。選択肢を見ると、どれも「人間」で終わっているので、近代の人間像をおさえればよい。

⑮ 人間は……妖怪を「見てしまう」不安定な存在、「内面」というコントロール不可能な部分を抱えた存在として認識されるようになったのだ。かつて「表象」としてフィクショナルな領域に囲い込まれていた妖怪たちは、今度は「人間」そのものの内部に棲みつくようになったのである。

⑯ 「私」は私にとつて「不気味なもの」となり、いつぼうで未知なる可能性を秘めた神秘的な存在となった。妖怪は、まさにこのような「私」を投影した存在としてあらわれるようになるのである。

近代の人間像は、「不安定な存在」「内面」というコントロール不可能な部分を抱え込んだ存在「不気味なもの」「未知なる可能性を秘めた神秘的な存在」であるから、選択肢④が正解。

正解 ⑩ ③ ⑪ ④

(iii) 【ノート2】を作成したNさんは、近代の妖怪観の背景に興味をもった。そこで出典の『江戸の妖怪革命』を読み、【ノート3】を作成した。空欄 **V** に入る最も適当なものを、後の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。

選択肢は全て「『菌車』の僕は」で始まっており、前半は「菌車」の説明である。また、後半は「これは、『私』が」で始まっており、近代の「私」の説明である。

前半は、【ノート3】の「菌車」との整合性を確かめればよい。選択肢②「心当たりがない場所」「安心しながら」「もう一人の自分に死が訪れる」はそれぞれ、「菌車」の「帝劇の廊下／銀座のある煙草屋」「仕合せにも」「死はあるいは僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかった」と対応している。

①は、「自分が周囲から承認」が誤り。

③は、「会いたいと思っていた」が誤り。

④は、「自分が分身に乗っ取られる」が誤り。

⑤は、「他人にうわさされることに困惑」が誤り。

この時点で、解答候補は②だけだが、一応選択肢後半もチェックする。前述したように、後半はどの選択肢も近代の「私」の説明である。

IV で考えたように、近代の人間とは「不安定な存在」「内面」というコントロール不可能な部分を抱え込んだ存在」であるから、②の後半「自分自身を統御できない不安定な存在」は正しい。正解は②。

正解 **12** ②

第2問 小説 加能作次郎「羽織と時計」（一九一八年発表）

（設問中に宮島新三郎「師走文壇の一瞥」（『時事新報』一九一八年二月七日）の引用あり）

〔総括〕

「羽織と時計」にまつわる、W君への思いを綴った小説。字数は約三六〇〇字。

一九一八年発表の作品で、言葉遣いにやや古さを感じられるが、内容の理解に支障をきたすほどではない。

設問の形式は、センター試験と類似しており、問1の語句問題、問2～5の心情把握の問題は内容的にもセンター試験を踏襲していると言える。問6は新傾向の問題で、「羽織と時計」の批評文として「師走文壇の一瞥」が引用されている。複数テキストを使用し、作品を多角的に解釈させたいという意図が感じられるが、作品を批評的に捉える設問は、従来のセンター試験でも出題されており、（見た目の印象としては変化しているものの）問われていることの内実が大きく変化しているわけではない。

〔解説〕

問1 語句問題 (ア) 基礎 (イ) 基礎 (ウ) 基礎

傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

「本文中における意味」を問う問題ではあるが、「辞書の意味との合致」が大前提である（辞書の意味に合致する選択肢が複数ある場合、その中から文脈に合うものを選ぶということはあり得るが、いくら文脈上適切でも、「辞書の意味」から外れるものは正解にならない）。

(ア)の「術もなかった」の「術」は「方法／手段／手立て」の意味。②「手立てもなかった」が正解。

(イ)の「言いはぐれて」の「はぐれ(る)」は、「時期を失する／○○しそこなう／○○しそびれる」の意味（「食いつぶされる」の「はぐれる」である）。「言いはぐれて」は、「言う時期を失して」「言いそびれて」の意味になるから、②「言う機会を逃して」が正解。

(ウ)の「足が遠くなる」は、「そこに行く回数が減る／訪ねるのが間遠になる」の意味。ここでは、「私」が、退社後にW君の家を訪れていないということなので、①「訪れることがなくなった」が正解。

問2 心情説明問題 標準

- 正解 (ア) **13** ② (イ) **14** ② (ウ) **15** ①

傍線部A「擦ぐられるような思」とあるが、それはどのような気持ちか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

周辺を抜き出す。

『よくそれでも羽織だけ飛び離れていいものをお拵になりましたわね。』と妻は言うのであった。
『そりゃ礼服だからな。……出られるからな。』私は 擦^Aられるような思をしながら、そんなことを言って誤魔化して居た。

「擦られるような思」とは、「くすぐったい気持ち」、つまり、「照れくさい」「きまりの悪い」気持ちである。右に示したように、妻は「私」が立派な羽織を拵えたことを褒めている。「私」には褒められたことの嬉しさはあるものの、その羽織は「W君から貰ったのだということを、……今だに妻に打ち明けてない」ことの「きまりの悪さ」があるのだろう。そうした「嬉しさ」「きまりの悪さ」を合わせて、「擦られるような思」と表現している箇所である。以上の内容を適切に説明している③が正解。

- ①は、「笑い出したい」が誤り。
②は、「不安になっている」が誤り。
④は、「物足りなく思う」が誤り。
⑤は、「妻に打ち明けてみたい衝動」「妻への不満」のどちらも誤り。

正解 **16** ③

問3 心情説明問題 標準

傍線部B「何だかやましいような気恥しいような、訳のわからぬ一種の重苦しい感情」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

周辺を抜き出す。

私は涙ぐましいほど感謝の念に打たれるのであった。それと同時に、その一種の恩恵に対して、常に或る重い圧迫を感じざるを得なかった。羽織と時計——。私の身についたものの中で最も高価なものが、二つともW君から贈られたものだ。この意識が、今でも私の心に、感謝の念と共に、^B何だかやましいような気恥しいような、訳のわからぬ一種の重苦しい感情を起させるのである。

傍線部前の「この意識」とは、「私の身についたものの中で最も高価なものが、二つともW君から贈られたものだ」という意識。これによって、「感謝の心」と「やましいような、気恥しいような、一種の重苦しい感情」が生じたという箇所である。W君の贈り物は嬉しいには違いないのだが、自分が普段身に着けることのないような立派なものをもたらったことで、どこか気おくれするような気持ちがあるのだろう。右のように、「常に或る重い圧迫を感じざるを得ない」と「重苦しい感情」が対応していることを考えれば、「私」は、W君の厚意に、気圧されているような状態だと考えられる。こうした内容を適切に説明している①が正解。①末の「とまどっている」は「訳のわからぬ」に対応している。

- ②は、「さしたる必要を感じていなかった」が誤り。
- ③は、「W君へ向けられた批判をそのまま自分にも向けられたものと受け取っている」が誤り。
- ④は、「自分へ向けられた哀れみ」が誤り。
- ⑤は、「見返りを期待する底意をも察知」が誤り。

正解 17 ①

問4 理由説明問題 応用

傍線部C「私はW君よりも、彼の妻君の眼を恐れた」とあるが、「私」が「妻君の眼」を気にするのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

彼が妻君の眼を恐れる理由は、傍線部直後～65行目で説明されている。

C
私はW君よりも、彼の妻君の眼を恐れた。私が時計を帯にはさんで行くとする、『あの時計は、良人が世話して進げたのだ。』斯う妻君の眼が言う。……。『○○さんて方は随分薄情な方ね、あれきり一度も来なさらぬ。こうして貴郎が病気で寝て居らっしゃるのを知らないんでしようか、見舞に一度も来て下さらない。』

斯う彼女が……。その言葉には、あんなに、羽織や時計などを進げたりして、こちらでは尽すだけのことは尽してあるのに、という意味を、彼女は含めて居るのである。

「私」は、W君の妻の「こちらは羽織や時計をあげて尽したのに、あなた（W君）が病気なのに見舞に來ないなんて、○○さんは薄情な方ね」という気持ちを想像し、見舞に行きづらくなっているのである。選択肢①「寝たきりで生活苦」「久しく疎遠になってしまい」「自分の冷たさを責められる」は、それぞれ、本文47行目「自分は寝たきりで、……、それでやっと生活している」、51行目「久しく無沙汰をして居た」、62行目「薄情な方ね」が対応している。これが正解。

②は、「転職後にさほど家計も潤わず…助けられない」が誤り。

③は、「一生忘れてはいけなと思う」「偽善的な態度を指摘」が誤り。

④は、「妻君の前では卑屈にへりくだらねばならない」が誤り。59行目に「私自身の中に、そういう卑しい邪推深い性情がある」とあるが、妻の気持ちを邪推することを「卑しい」と言っているものであり、妻君の前で「卑屈にへりくだる」という話ではない。

⑤は、「立派な人間と評価してくれたことに感謝」が誤り。

正解

18

①

問5 内容説明問題 応用

傍線部 D 「私は少し遠回りして、W君の家の前を通り、原っぱで子供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に餡パンを買わせた」とあるが、この「私」の行動の説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。

「私」は見舞いに行っていない後ろめたさを解消することを欲し、67行目「何か偶然の機会で妻君なり従妹なりと、途中ででも遇わんことを願うが、そうした機会は訪れない。そこでW君の店を訪れることにしたのが傍線部Dの場面である。「原っぱで子供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に餡パンを買わせた」という、まわりくどい行動をとったのは、76行目「陰ながら家の様子を窺い、うまく行けば、全く偶然の様に、妻君なり従妹なりに遇おうという微かな期待をもって居た為め」である。⑤が正解。

- ①は、「質素な生活を演出しようと作為的な振る舞い」が誤り。
- ②は、「妻にまで虚勢を張る」が誤り。
- ③は、「家族を犠牲にしてまで」が誤り。
- ④は、実際に「W君の家族との間柄がこじれてしまった」わけではない。「稚拙な振る舞い」も誤り。

正解 ⑤

19

問6 作品の批評に関する問題 応用

次に示す【資料】は、この文章（加能作次郎「羽織と時計」）が発表された当時、新聞紙上に掲載された批評（評者は宮島新三郎、原文の仮名遣いを改めてある）の一部である。これを踏まえた上で、後の（i）・（ii）の問いに答えよ。

（i）【資料】の二重傍線部に「羽織と時計とに執し過ぎたことは、この作品をユーモラスなものにする助けとはなかったが、作品の効果を増す力にはなっていない」とあるが、それはどのようなことか。評者の意見の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

【資料】の評者によると、加能作次郎の長所は「生活の種々相を様々な方面から多角的に描破して、其処から或るものを浮き上がらせ」る点にあり、「ライフの一点だけを覗いて作をする」のはこの作家の性質ではない。しかし、「羽織と時計」は、羽織と時計にまつわる思い出を中心とした「小話」じみた作品になっており、生活の種々相をありのままに書くという作者の本領が発揮されていない。以上のような【資料】の内容に適した説明となっている、④が正解。

- ①は、「多くの挿話から」が誤り。
- ②は、「実際の出来事を忠実に再現しよう」と意識しすぎた」が誤り。忠実な再現を目指していなかったのが「羽織と時計」である。
- ③は、「W君の一面だけを取り上げ美化」が誤り。

正解 20 ④

（ii）【資料】の評者が着目する「羽織と時計」は、表題に用いられるほかに、「羽織と時計——」という表現として本文中にも用いられている（43行目、53行目）。この繰り返しに注目し、評者とは異なる見解を提示した内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

53行目「羽織と時計——併し本当を言えば、この二つが、W君と私とを遠ざけたようなものであった」とある。W君の厚意がかえって、私に「重い圧迫」（42行目）を与え、見舞いに行きづらくなってしまったのである。この点を指摘している④が正解。

- ①は、「W君を信頼できなくなっていく『私』の動揺」が誤り。
- ②は、「複雑な人間関係に耐えられず生活の破綻を招いてしまった」が誤り。
- ③は、「羽織と時計」の繰り返しは、「私」の思いの表現であり、W君の思いの純粋さを表現したものではない。

正解

21

④